

御影堂門の屋根は瓦の状態が概ね健全であったため、下地となる土居葺部分についても傷みの箇所は局所的であり、土居葺工事も順調に進みました。これにより、瓦の葺き上げについても、予定通り今年の十月半ばより作業が開始されています。

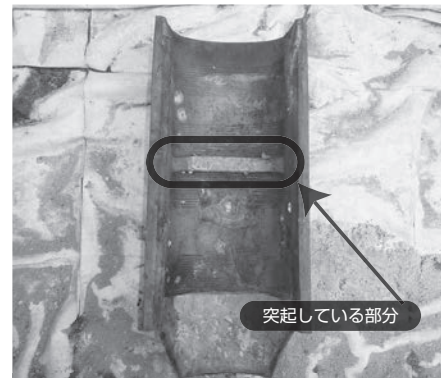
ところで、本誌二〇一三年一月号で既報のとおり、御影堂門の特徴として、軒先の瓦が非常に長く



軒唐草瓦が葺かれた様子



↑丸瓦(表面) ↓丸瓦(裏面)



突起している部分

作られていることが確認されています。これは、雨が瓦をつたって下に落ちる際に、建物に近接していると、風の強さや向きによって建物の木部を濡らしてしまい腐食の原因となるため、軒先をなるべく外に出そうとする工夫と推測されます。

また、瓦を降ろす作業の中で、御影堂門の明治瓦には、もうひとつ御影堂・阿弥陀堂とは異なる工夫が施されていることが確認されました。これは瓦の裏面に突起物を作ることで、葺き土にしっかりと食い込ませ、もし下部の瓦

が落下しても、上部の瓦も一緒に落下しないように固定するものです(左・写真参照)。

このような事例から、明治期再建の棟梁である市田重郎兵衛(途中で息子の辰蔵が棟梁を引き継ぐ)が一八九五(明治二十八)年までの両堂再建にも携わった経験から、御影堂門の再建においてさらなる工夫や改良を施していたことがわかり、御修復事業によって新たに発見された工夫から、多くの門徒の願いや期待に応えんとするその心意気が伺えます。

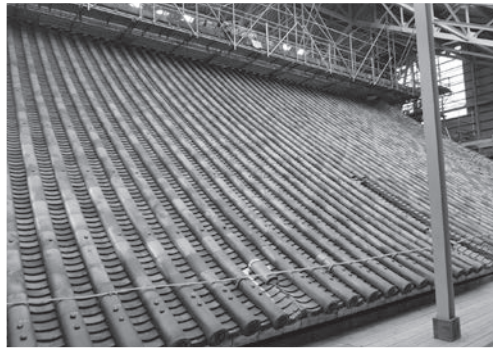


御修復のあゆみ

御影堂門の瓦葺き上げに着手

く 伝承された先達の願い く

御影堂門では、明治期の再建から百年以上が経過したことによる屋根の傷みや木部の損傷などが確認される中、屋根瓦の葺き替えをはじめ、損傷の著しい木部の補修などの各専門工事が行われています。



修理前の様子



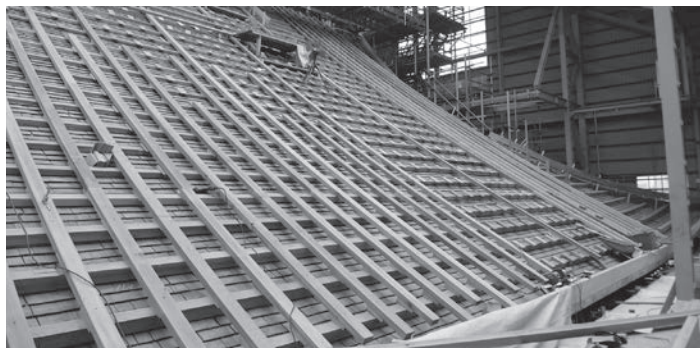
瓦降ろし作業の様子

事前調査での屋根瓦の破損状況としては、凍害による「割れ」「欠け」や「虫食い」とよばれる傷みなどが全体に散見されており、特に、軒先の丸瓦(巴瓦)の破損が目立っていました。

二〇一三年八月から始めた瓦降ろしの作業では、軒先の丸瓦は傷みが激しいものの、軒先の平瓦(唐草瓦)においては破損がほとんど見あたらず、健全な状態を保っていることが分かりました。

この他、全ての瓦を再利用が可能なかを確認しながら一枚一枚降ろしたところ、御影堂で約七割、阿弥陀堂では約九割以上の瓦を新調せざるをえなかったことに比べ、御影堂門では東西に付属する山廊(さんろう)(※御影堂門の両脇にあつて上層にある階段を覆っている建物)を含めても半数程度の新調でよいことが判明しました。今後、葺き上げの段階で再度確認していくため、最終的な再利用率は明確ではないものの、

の、両堂に比して多く再利用できるものと見通しが立っています。

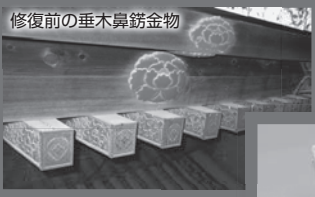


空葺き用の下地

阿弥陀堂御修復「指定寄付のお願い」

※阿弥陀堂・御影堂門御修復懇志のご協力をお願いします。

阿弥陀堂の御修復に伴い、「工事」並びに「仏具」を対象とした指定寄付(174口:1口100万円)と垂木鼻 鋳金物(たるきばながざりかなもの)(1,240口:1口5万円)を対象とした指定寄付を募集しております。全国の有縁の皆様より尊いご懇念を賜りますよう、何卒ご奨励、ご協力をお願いいたします。



修復後の垂木鼻鋳金物